

會學濟經學大國帝都京 叢論濟經

號五第 卷三十第

行發日一月一十年十正大

論叢

租税に於ける補完作用に就て . . .

植民政策是非 . . .

利潤の經濟的及び道德的性質 . . .

進歩か退歩か . . .

農業勞働問題 . . .

時論

地方税制度の整理を論ず . . .

說苑

大邱の令市に就いて . . .

雜錄

滿洲に於ける支那商店の帳簿 . . .

社會主義の分類 . . .

獨逸大都市に於ける離婚數の激増 . . .

法學博士 神戸 正雄

文學博士 原 勝郎

法學博士 田島 錦治

法學博士 財部 靜治

法學博士 河田 嗣郎

法學博士 小川郷太郎

經濟學士 黒 正 巖

法學士 大森 研造

經濟學士 小林 輝次

法學士 汐見 三郎

利潤の經濟的及び道德的性質 (三・完)

田 島 錦 治

第三節 利潤の正當性及び社會主義の誤謬

第一款 社會主義は利潤の各成立要素及び其眞髓を理解せず

前節に於ては、利潤の原因及び要素を述べたるか、既に之に依るも余の將に本節に述べんとする利潤の正當なること、及び之に對する社會主義説の誤れることは略は明なりと信す。されど猶ほ盡さざる所あるを以て、茲に之を論究すへし。

凡そ或事項の正當不正當を論斷せんとは、先其事項の各成立要素に就て精密に考察するを要す。若し其成立要素の一部のみに着目して、直ちに全體を推測するか如きは最も不可なり。ラッサールが利潤を以て現時の社會關係に基づく幸運的收入にして、此幸運は獨り資本を有する人のみ攫み取るを得るものと爲す考の如きは其一例なり。實に利潤の一要素に幸運的利益なるものあるは前節に述べたり、然れども是れ決して各企業者の利潤に常に普遍的に存在する唯一要素に非ず（前節參照を要す）。

又或事項の正當性を論斷するに當りては、常に其各要素に就て一々精査するを要するのみなら

す、其眞髓とも謂ふ可き部分を抽出して、之に就て最も精確なる判斷を下すを要す。利潤に就ては其眞髓は企業者の優秀なる能力より來る利得即ち所謂純利潤これなり。然るにラッサールもマルクスも其他社會主義者も多くは此眞髓に觸れずして、徒らに外皮の一部を捕えて其疵瑕を指摘し喋々論議す。マルクスが企業者を資本主と汎稱し、資本主を人間化せる資本と呼び、資本主對勞働者の關係を以て死せる勞働(即ち資本)が生ける勞働を使ふは條理に反すと論するか如きは其著しき一例なりとす。要するにマルクスは資本と資本主とを混同し、少くとも資本主の生産上に於ける人格を認めず。是れ猶可なりとするも、併せて企業者の人格を無視し、此人格より生ずる收入即ち純利潤をも認識せず、一概に利潤又は利子を不當利得なり、播種せざる收穫なり、勞働の生産したる所のものの横奪なりと斷定す。是れ事項の眞髓を察せざるより來れる誤謬なりと謂ふ可し。實に現代企業者の中には貪婪狡黠破廉恥の輩亦尠からずして、愚直なる勞働者を欺き、虐使し、又は社會公衆を瞞着し、不正の利を漁すること往々これ有り。然れとも斯の如き事件は必ずしも現代に特有のものにあらず、又現代の總ての企業者に通有のものに非ず。一般に論すれば現代の自由交通の行はるる時代に於ては上述の弊害は寧ろ輕減するものと謂ふ可く、其殘存又は新發せるは幾分か各種法制の力に依りて矯制豫防するを得べきものなり。且又企業者全體に就て考察すれば其大部分は少くとも平均程度の經濟的及び道德的品性を具ふる者と推定するを至當と

す。何となれば若し斯く推定すへからすとせば、畢竟人を人として取扱はす。惡人として取扱ふこととなるへければなり。且實に企業者の一部には常に義俠慈善の精神に富み、絶えず愛國奉公の美譽を行ふものあり。然らばマルクスやラッサールの資本主觀企業者觀は側視偏見して正視全見に非ざるや明なり。

但し茲に注意すへきはマルクス及びラッサール等は必ずしも現代の資本主の利潤を以て不法に獲得したるものと爲さずして、寧ろ合法的に獲得したるものと爲すことなり。從て彼等は必ずしも現代の資本主即ち企業者の大部分を以て悖德漢不法漢と見做す者に非ず、唯現代の社會關係又は産業組織が自づから労働者の生産物を剝奪して資本主に與ふることなると思考するなり。此點は更に後段に詳論すへしと雖も、要するに社會主義は企業者なる人格を正當に認識せず、從て此人格に本く利得即ち純利潤を理解せず、且彼等は啻に此利潤の眞髓を理解せざるのみならず他の諸要素に就ても其説く所は大抵偏狹に非されは則ち誤謬なりとす

第二款 社會主義者の資本觀、資本成立及び増加の一要因たる

貯蓄に對する彼等の謬見

前に屢述へたる如く、社會主義者は資本主と企業者とを混同し、資本より生ずる利子と企業より生ずる利潤を明確に區別せずして、往々資本の利潤 profit of capital と云ふ如き曖昧なる語を

使用するか故に、彼等の利潤に對する意見を批評せむと欲せば、勢ひ彼等の資本に對する觀念を討究せざるへからず。

經濟學者は資本を以て(1)積蓄せる勞働なりと爲し、(2)生産物にして生産方便たるものなりと爲し、又は(3)迂曲生産手續に於ける中間的生産物の總體なりと爲す。社會主義者例へはラッサールの如きは經濟學者が資本を以て何れの時代にも存在する永久的論理的事項と爲すに反對し、之を以て歴史的事項に外ならずと思考し、資本は唯分業に因りてのみ發生し、分業は唯奴隸制度に因りてのみ發生すと思考したり、又經濟學者は資本の成立及び増加を以て(1)制慾又は貯蓄の結果なりと爲し。或は(2)生産及び貯蓄の結果なりと爲す。社會主義者特にラッサールは制慾説を一笑に附し、以爲らく斯の如き消極的行爲は決して資本を生むものに非ず、資本主に向て資本及び利潤を生むものは彼の雇使する所の勞働者の勞働なりと。彼の唱出せる有名なる對語 *Eigentum, Fremdbothum*. は最も善く此思想を表はす所のものなり。

舊派經濟學説が資本の成立原因を單に制慾又は貯蓄に歸するは、偏狹の嫌無からずと雖も、社會主義者か之を勞働にのみ歸する説は亦正當に非ず。生産即ち勞働を自然に加ふる所の積極的行爲と、斯くして生産せられたるものの一部を消費せしめて之を貯蓄する所の消極的行爲との兩者相踈ちて始めて資本の成立を見るは之を事實に徴し、又は理論に考へて明白毫も疑を容れざる所

なり。且茲に注意を要することは現代の貯蓄は物を消費せずして之を保存するの消極的方法即ち單純なる貯藏 (hoarding, hoarding) なるよりは寧ろ物を生産的に消費する積極的方法即ち投資 (investment, placement) なることなり。企業者に非ざる資本主か其所有する資本を銀行に預入れ、又は直接に企業者に貸付くるは、即ち貯蓄にして且投資なり。企業者か此等の借入資本と共に自己所有の資本を其生産事業に使用するは、同じく貯蓄にして且投資なり。前者は間接的投資にして、後者は直接的投資なり。資本主及び企業者か其資本を自己の享受方便として消費せざるか故に貯蓄なり、而して之を自己又は他人の生産方便に充つるか故に投資なり。

現代の社會に於ては、單純貯蓄を爲す者は漸く減少して、投資は一般に益々盛に行はれ、社會主義者の謂ゆる無産階級 (proletariat) 即ち勞働階級の中に於ても此投資を爲すもの及び其額は年々著しく増加しつつあるは諸文明國の統計上爭ふ可からざる事實なり。蓋し彼等は其賃金の一部を貯蓄し投資し、而して此投資より生ずる利子又は利潤を受け取り、更に其利子利潤の全部又は一部を貯蓄し投資し、斯くして一國の資本は益々増加し、企業は益々發達し、勞働者の地位は益々進歩す。由是觀之、貯蓄は縱令ひ資本の成立及び増加の唯一原因に非ずとも其重要原因たることは毫も疑を容れず。且此の如く貯蓄即ち投資に由りて密に企業者のみならず、勞働者も亦利益を受くることを注意す可し。蓋し現時の企業者は自己所有の資本のみにては到底其力を逞ふする能

はす、故に他人より直接に、又は銀行を歴て間接に、其所要の資本を借り入る。而して此資本の一部又は其著しき部分は労働者階級を含む所の中産階級以下の貯蓄より成るが故に労働者階級は企業者に對して二重の利益關係に於て結び付けらるるものなり。其一は彼等が労働者として直接に彼より賃金を受くる關係なり、其二は投資者として間接又は直接に彼より利子又は利潤を受くる關係なりとす。果して然らば社會主義者か『資本主に向て利子利潤を生むものは、彼等の雇使する所の労働者の労働なり』と思考するは正確に非ず。實に利子を生む者は資本、利潤を生む者は企業、労働者をして利子利潤の分け前に與からしむるは彼等の貯蓄を企業に向て積極的に投資せしむるに在るなり。

社會主義者は資本主か與ふる所の一般労働者の賃金即ち勞賃を以て、最小生活費用に相當するものと爲し、從て労働者は毫も貯蓄を爲すの餘裕なきものとなし、經濟學者か『資本は労働の積蓄』なりとの意見に對して、『然り、然れども他人の労働の積蓄』なりと答辯し、資本を以て『他人の労働の結果を横領するの方便』なりと論ず。ブルードン、ロードベルツス、ラッサール、及びマルクス等の説は皆一に茲に歸着す。然れども現代社會に於て謂ゆる労働階級か如何に巨額の貯蓄即ち投資を爲すかの事實を舉證すれば、彼等の説の根據の一半は破壊すへし。

ルロワ・ボリュエ氏は其著 *Collectivisme* の下註に於て曰く『千九百年十二月三十一日調に於て

私立貯蓄銀行の出せる預金帳の數は七百十一萬六千四百二なり。之に官の郵便貯金の預金帳數三百五十六萬四千四百六十四を加ふるときは合計千六十八萬八百六十六帳となるへし。而して貯金の殘高は私立貯蓄銀行の分、三十二億六千四百萬法に達し、官の郵便貯金の分、十億一千萬に達し、合計四十二億七千四百萬法に達したり。之を千八百八十二年に比すれば、同年に於ては預金帳數四百六十四萬五千八百九十三部、貯金殘額十八億二百四十九萬七千八百九法なりしか故に、帳數は六百三萬四千九百七十三部を増加し、貯金殘額は二十四億七千二百萬法を増加したるものなり』と。氏は此統計に據り、本欄に於て斷言して曰く『佛國に於て官私の貯金銀行が一千萬の預金者を有する事はラッサールの説を最も善く打ち消すものなり』と(Le Collectivisme, 3e éd. 1909, p. 236-237)。實に此等の貯金者の大部分は最低賃金を受くる肉體的勞働者にして、彼等の克己節儉は各々零細なる貯金を勵行し、其子弟も亦之に倣ひて之を繼續増加し、前掲の如き結果を生ずるに至りしなり。

我國に於ても、近年ラッサールやマルクスに心酔せる徒は、階級鬭爭の空想に驅られて無產階級と勞働階級とを同視し、而かも彼等の謂ゆる無產階級の中に多數の有產者有り且其増加しつつあるを悟らざるものの如し。左の郵便貯金及び私立貯蓄銀行貯蓄預金の統計は最も雄辯に彼等の誤想を説破するものなり。

帝國郵便貯金統計

年 度	年末現在預人員	年末現在預高(圓)	人口百ニ付
-----	---------	-----------	-------

明治三十五年	三、七三、二八	六〇、〇五五	五、七九
明治四十年	七、八七、六九五	九、五三、五八六	一五、七〇
明治四十五年	一、三、五三、一〇四	一、九七、九三、七五九	三、八六
大正元年	一、五、九八、六三	二、九八、五五、五二三	五、四二
大正五年	一、六、九八、一〇八	四、二九、九七、四三七	三〇、二五
大正六年	—	五、四四、九八、四七九	—
大正七年	—	六、八九、二五、九六〇	—
大正八年	—	八、七五、五〇、七七七	—
大正九年	—	—	—

備考、明治三十五年乃至大正六年の統計は帝國第三十八統計年鑑(大正九年三月刊行)に依り、大正七年以下は日本銀行調査局(大正十年四月刊行)の本邦經濟統計に據る。

貯蓄銀行貯蓄預金及人員統計

年度末ニ於ケル人員金額業體別

年 度	年度末殘高	農		商		工		雜	
		人員 (千人單位)	金額 (千円單位)	人員 (千人單位)	金額 (千円單位)	人員 (千人單位)	金額 (千円單位)	人員 (千人單位)	金額 (千円單位)
明治三十五年	五、一、五七	三、一一	一〇、一、八四	一、四、一六	一、六、五、四〇	四、四一	五、〇、四六	一、八、八三一	三〇、八、三一
明治四十年	一一、九、〇四	一、四、九〇	二、七、〇、三六	一、一、三二	三、六、六、四四	五、四一	一〇、〇、八六	三、八、六六	四六、一、四〇
明治四十五年	一、五、二、四	二、〇、一四	四、四、一、四四	二、一、四四	五、〇、〇、一一	六、八六	一六、一、四四	五、四、四四	五七、六、四〇

大正五年	100・410	210・374	316・660	21・484	313・774	210	1・814,444	21,184	21・484	210・410
大正六年	316・275	216・374	316・275	21・484	313・774	210	1・814,444	21,184	21・484	210・410
大正七年	216・374	216・374	216・374	21・484	313・774	210	1・814,444	21,184	21・484	210・410
大正八年	216・374	216・374	216・374	21・484	313・774	210	1・814,444	21,184	21・484	210・410

備考、明治三十五年乃至大正六年の統計は帝國第三十八統計年鑑に據り、大正七年以下の分は大藏省刊行英文第二十財政經濟年報（一九二〇年刊）に據る

此二表に據るに、明治三十五年乃至大正六年の十五年間に於て郵便貯金者（年末現在）の數は大約二百七十萬人より千六百九十五萬人に増加し、貯金額（年末殘高）は二千八百八十萬圓より四億一千六百九十四萬圓に増加したり。私立の貯蓄銀行の貯蓄預金者（年末現在）の數は農工商及ひ雜を合して明治三十五年度に四百五十六萬人を算したる者か十五年後の大正六年には一千三七萬人を算するに至り、貯蓄預金額（年末殘高）は同年期に於て五千一百六十四萬圓より二億五千九百二十七萬圓に増加したり。故に兩種貯金を合して計算するときは、明治三十五年より大正六年に至る十五年間に於て、貯蓄預金者の數は大約七百二十六萬人より二千七百三十二萬人に増加し、貯蓄預金額は大約八千四十五萬圓より六億七千六百二十二萬圓に増加したるものなり。而して大正七年以後の増加は更に著しきものあり。要するに是等の預金者の大多數は中産階級以下にして、多數の肉體的勞動者を含むは毫も疑を容れざるなり。然らば社會主義者か貯蓄の資本成

立原因たるを否定し、及び彼等か一般労働者の賃金の額は辛ふして生活を維持するに足るのみにして、毫も貯蓄を爲すの餘裕なしと思考するの謬想たるは前掲貯蓄の諸統計に徴して明々白々たり。

中産者特に労働階級の零碎なる貯蓄は億萬の巨資と爲りて、公私の企業に活用せられ、利子及び利潤を生み、而して貯蓄者は少くとも當然此利子の分ヶ前に與かるを得、場合に由りては利潤の分ヶ前にも與かるを得へし。例へは利率の高き社債券の募集に應し、又は確實有利なる株券を買入れ所有したる場合の如きは是なり。從來個人企業者又は會社にして利潤を労働者に配分したるもの少からず、又は近年彼等に配分すへき利潤又は支給すへき賞金の代りに株券を與ふるもの多々有り、米國の鋼鉄トラストの如きは其著るしき例なり。由是觀之、社會主義者か資本及び利子利潤を以て労働者の生産したる所を資本主の横領する所のものなりと思考し、*ラッサール*か *Eigenum, Fremdbthum* なる對語を唱へて得々たるの謬れるは明なり。要するに利子を生むものは資本、利潤を生むものは企業、資本を生むものは生産と貯蓄、生産は自然に労働を加ふるに始まり更に資本を用ふるに由りて漸く完全となり、而して此自然労働資本の三要素を適當に結合するは即ち企業なりとす。労働者と雖も零細乍らも貯蓄即ち投資を爲すに由りて資本主の資格を兼ねるを得、又は小株主となりて企業者の資格を兼ねるを得、斯くして彼等は勞賃の外に利子又は利潤

をも取得し得べきなり。而して實際に於て勞働者にして前述の如き資本主又は企業者の資格を兼ねる者は文明國に於ては年々増加しつつあり。亦以て社會主義者の階級二分説及び階級闘争説の虚妄なるを知るべきなり

第三款

ラッサールの資本は分業は由りて生るこの説及び

ルロワ・ボリユー氏の駁論

ラッサールか『資本は分業に由りて生れ、分業は奴隸制度より生れたり』の説に對してはルロワ・ボリユー氏之を論駁すること甚だ詳悉にして間然する所あるを見ず。氏は先づラッサールの言を挙げ更に之を論評すること左の如し。

ラッサール曰く『分業は總ての富の根源なり。茲に凡そ生産は分業に依るに非されは益々多く又益々廉く成り能はすとの法則あり。此法則は勞働の性質に基礎を置くものにして、一の自然法則 (*une loi naturelle*) と名けられ得たる唯一の經濟法則なり。然れども實は自然法則には非ず、何となれば分業は自然の領分に屬せすして精神の領分に屬すればなり。然れども分業は電氣、引力、蒸汽力等と同様に必要なる任務を帶ふ。實の分業は一の自然的社會法則なり (*une loi sociale naturelle*)。而して茲に全國民の中に唯個人の少數のみ來りて、其個人の利潤の爲に、總ての中只智慮ある人 (*la nature intellectuelle de tout*) に由りてのみ現はし得る所の此自然的社會法則を

取上げたり。他の杲然たる貧困の多數民は目に見えぬ鎖に繋がれ、常に増加し且常に益々蓄積せらるる彼等の勞働の生産物の中より、長き事情の下に於ても只僅かに彼の印度人か未開時代に儲け得たるもの、即ち生活の物質的需要を辛ふして滿し得る分量丈を得るに止まれり。嗚呼是れ恰も少數の人々が引力、電氣、蒸氣力、太陽の溫熱を以て彼等の財産なりと宣言したるに似たるものなり。彼等は勞働を爲さしむるに適當なる狀態に民衆を維持する爲に民衆を養ふことは恰も彼等か蒸氣機械に燃料を與へ及び油を塗るか如くすへし。民衆の扶養は唯必要なる生産費と思考せらるるのみ』と (Ferdinand Lassalle : M. Bastiat Schulze [De Delitsch], traduction de B. Mathison, page 249)。

ルロワ・ホリニー氏は之を評して曰く『此派手なる文章を要約すれば、資本主等か彼等自身の特別なる利潤の爲に、分業といふ此有力なる自然的社會法則を取上げたりとの考に歸着す。カー・マルクスも亦同種類の考を抱きて、資本の所有者等は彼等のみの利益の爲に科學を捕へて之を利用すと言ひたり。此種類の考に従へば世界民衆は凶怪なる矛盾の犠牲となるへし。輓近の社會に於ける巨大なる生産は共同的共働的生产なれども、生産物の分配は共同的に非ずして個人的なり。分業は離れ離れの勞働か生む所のものに超過する餘剩的生产物を生む、而して此餘剩的生产物即ち餘剩價值は宜しく總ての人の有に歸す可きものなるに、唯資本主のみか之を横領す。

此道理らしき考は、之を打破すること容易なり。若しラッサールの言ふ如くならば、勞働者の組織する共働組合 (les sociétés coopératives) は、總て、又は少くとも概して成功し繁榮すべき筈なり。何となれば夫の分業に原因すと考へられ、及び雇主は何等の骨折なくして只彼自身の爲に横領し得たりと信せられたる自然的餘剩價值は共働組合の場合に於ては當然組合員即ち勞働者に歸すへけはなり。然るに經驗は反對の證明を爲し、共働組合の大多數は殆んど無利子か又は低利なる資金の補給を受けたるものと雖も、經營困難に陥あり、又は辛ふして餘喘を保つのみ。次に尙明確なる反駁あり、即ち下の如し。現代最も多くの文明國に於て、及び多くの種類の産業に於て、中規模の企業者及び自動的生産者にして、自から生産要具を所有し、少數の勞働者を使役する者尙多く存在すれども、是等雇主の地位は必しも熟練勤勉なる雇傭勞働者より幸福に非ざることを往々目撃す。最後の反駁は「ラッサールの議題を破壊し了るものにして、即ち下の如し。世間には大產業家又は良組織の會社にして、毫も利益を擧げず、中には損失を受けて解散する者すら多くこれ有るを見る。此事たるや、分業より生し、而かも雇主のみを依りて特別の私益を占むるを得と思考せられたる所謂必然的自然的餘剩價值なるものは、或は存在せず、或は些細の事に屬し、或は企業者以外の者をも利益するものなることを證明して餘蘊なしと謂ふ可きなり」(Le Collectivisme, p. 234-236)。

ラッサールは貯蓄が資本成立の一要因たることを否定し、分業を以て資本成立の原因なりとし而して分業を行ふには資本を要するか故に、後期の分業は前期の分業に由りて先立たることを述べ、結局分業の起源は奴隸制度に在りと論し、『故に文明國民の搖籃に於て奴隸制度の案出されたるは一善なり』との大膽なる論結を下せり。(前掲ラッサール著書二三頁)。ルロワ、ポリュエ氏は評論して曰く『ラッサールの説に従へば奴隸の所有者は非常に聰明利發の人にてありたり。學理上より見るも又歴史上より考ふるも此説は疑はし。未だ曾て奴隸制度を有せず、又は甚だ早く奴隸狀態より解放せられたる人民、例くは日耳曼人の如きは亦能く分業を行ふに至り、且資本を作るを得たり。歐洲に於ては奴隸又は農奴の廢絶後、分業は益々發達したり。之に反して奴隸制度の最も永く維持せられたる諸植民地に於ては、奴隸制度は常に分業及び機械適用の最大障礙と思考せられたり。故にラッサールの議題は輕忽なるものと認めざるを得ず』と(前掲同氏著書二四三頁)。

以上述へたるラッサール氏の分業は資本の成立原因なりとの僻説に對するルロワ、ポリュエ氏の反駁は先づ余輩の意を獲たるものなり。是れ余が其一部を譯出して余の説に代らしめたる所以なり。資本の成立并に増加は生産及び貯蓄に在るは余の屢々確説したる所なり、而して企業者は生産を主宰し生産要素を適當に結合する任務を有するか故に、彼は他人の資本を借用する場合には

死せる貯蓄を變して活ける投資と爲す者なり。又彼は他人の勞働を雇使する場合には、適材を適處に置くを勉め、即ち分業を適宜に行ひ、發明發見を適當に利用すへし、余は純利潤を以て企業者の人格に本づく收入なりと述へたり、換言すれば利潤は企業者の優秀なる企業的能力に基く所の餘剩的收入なり。企業者か他人の貯蓄を最も適當に運用し、又は分業を最も完全に行ひ又は發明發見を最も巧妙に利用したる時は、是亦彼の優秀なる企業的能力の發揚なりと謂ふ可し。果して然らば彼か之に由りて最も多くの利潤を一時獲得し得へきは必然の結果にして、且正當なる事件なり。然れども彼は只一時之を獲得し得るに止まる。何となれば自由競争は間もなく他の企業者をして彼と同等又はそれ以上の能力を發揮せしむるものなればなり。是故に企業者か他人の貯蓄并ひに自己の資本を運用するに由りて其利子以上に多くの利潤を得るは難し。又彼か分業の新案及び發明發見の新利用に由りて得る所の利潤は一時に止まり決して永續することなし。而して以上の事項に由る所の生産費の低減、及び之に伴ふ所の生産物價格の低落は消費者たる社會民衆を一般に利益するの良結果を奏すへし。利潤か社會主義者の思考する如き不正義のものに非ずして、實に經濟的にして且道德的なる性質を具有するものなるは上述する所に由りて明かなり。

第四款 マルクス氏餘剩價值説の説明及び批評、

利潤は社會を利益する徵證なること

余は前款に於て、ラッサールの説即ち分業なる自然的社會法則は資本主の個人的利潤の目的に向て横奪せらるゝとの説を掲げ、カール、マルクス亦同様の考を抱きたりとのルロワ、ボリュー氏の評語を掲げたるか、此種類の考に先鞭を着けたる者は實に佛人ブルードン氏なりとす。ルロワ、ボリュー氏の説に従へばブルードンの説はマルクスに由りて無斷にて剽竊せられたるもの多く、而して利潤の不正當に關する説も亦其一なり。ブルードンは謂へらく、唯附加せられたる個々の力よりは之を綜合したる合衆力の方が生産力大なり、而して此生産力の差増は企業者の奪ひ取る所のものなり。又企業者は科學の發明を自己の特別の利益の爲に横領す、詳言すれば同一の産業に於て、多數人に由り秩序的に組織せられたる協力は、其同じ人々か別々に離れて聯絡なく働くよりは多くを生産すべく、分業、機械、物理、及び化學等の諸法則の知識は人の勞働の生産的結果を増加すへし、而して此等の生産増加は企業者の利潤を生むものなりと。(Proudhon, *Système des contradictions économiques*, 4^e éd. tome 1^{re}, page 243)。ロッドベッススの意見も亦之に同し、氏は謂へらく、企業者の利得は彼が占むる所の社會的優秀なる地位の力に由りて勞働者の勞働より横領したる所のものなりと。

マルクスは是等先覺者の説を取り、更に自己の巧智を加へて、有名なる餘剩價值説を作りたり氏は謂へらく、雇主は勞働者の勞働力を買ひ、更に之を再賣することに由りて利潤を得るものな

り。即ち彼は勞働力を其交換價值にて買ひ、其生産したる物即ち商品に具體化したる勞働力を其交換價值にて再賣す。此兩交換價值の差即ち餘剩價值は彼の所得となる。凡そ商品の價值は其生産に要したる勞働即ち生産費に由りて決定せらるへし。故に十時間の勞働を要したる商品の價值は十時間勞働なり。然らば勞働者の勞働力 (Arbeitskraft) の價值即ち勞賃は如何にといふに、勞働力も亦一の商品なるか故に他のすべての商品と同じく、例へば機械の如き生産方便と同じく、其生産費に由りて決定せらるへし。機械の生産費が其日々に消費する石炭及び減價補充積立金より成るか如く、勞働なる人的資本の生産費は勞働者自身並に其家族を維持するに要する生活資料ならざる可からず。今假りに此生活資料の價值は五時間勞働なりとすれば、勞働者の勞働力の價值、即ち勞賃として雇主より勞働者に支拂ふ所のものは、五時間勞働なり。斯くして雇主に賣られたる勞働力は一十時間の勞働を爲すに於ては、其生産物の價值は十時間勞働ならざるへからず。斯の如くにして雇主は五時間勞働の餘剩價值を日々に利得し、勞働者は五時間の無償勞働を日々勤むるものなりと。此マルクスの説は頗る人口に膾炙す。社會主義を奉ずる人は之を以て金科玉條と尊敬し、經濟學者特にルロワ、ボリユール氏は之を兒童らしき説明 (explication tout à fait enfantines) として嘲罵す。氏は曰く『マルクスは雇主たる企業者を監獄看守人と同視し、勞働者をして最大勞働を爲さしむる様に監視するものと爲せども、企業者の任務は決して斯の如く簡單

なるものに非ず。今若し世界の中の最良なる監獄看守人を招きて最も簡單なる産業を掌らしめんか、彼等の大多數は破産すべきを斷言し得へし。若し企業者の利潤に關する社會主義の説明が眞實なるときは、換言すれば、別々に離れて働く勞働よりは之を結合して働かしむる勞働の優秀なる成績に由り、又は科學の進歩に由る生産の増加を横奪するに由りてのみ企業者は其利潤を得るものなりとせば、總ての企業者は成功すべき筈なり。然るに實際の事實は之に反し、商工業に従事する企業者の十中二三は失敗し、又は破産し、五六は彼等の辛勞に對する僅かの報酬を得て生存し、其現狀を維持し、又は至て輕微なる發展を爲し得るに止まり、只一二の著るしき富を作り得るに過ぎざるなり。……社會主義者が企業者の利潤を以て勞働者を犠牲に供するより來るものと爲す者は亦謬れり。彼等の考に従へば、企業者は其使役する勞働者の勞賃を低くすることを得れば得る丈多く利潤を獲得するものとす。然れども此考は勞賃に關する現代の學說に反するものならず、英米の如き産業の尤も盛なる國々に於て、一般に實行せらるる方法に適合せざるものなり。實に生産の最も大なる勞働は、最も裕かなる報酬を受くるものにして、與き勞賃は高き利潤の通常の原因に非ざるは是れ其真相なりとす』と (Leroy-Baulieu, *Traité theorique et pratique d'économie politique*, 6^e éd. 1914. tom. 2. p. 239-242)

之を要するに、純利潤は企業者の優秀なる企業能力に基つくものなる以上は、決して科學の進

歩の結果を横奪するものに非ず。又労働者の利益を犠牲に供せしむるものに非ず。而して斯の如き企業者間の競争が彼等をして永く其利潤を享くるを得さらしめ、生産物の價格が其時の最大生産費に由りて決定せられたるものは、久しからずして其時の價格は前時の最小生産費に由りて決定せらるるに至り、結局消費者階級即ち一般社會は大なる利益を享くべきなり、企業者が自己又は他人の爲したる科學上の發明を適當に利用するは是れ其優秀なる企業能力の發揮なり。又別々に離れて働く所の效果少き労働を適當に結合し、分業協力の組織を適宜にし、機械其他生産設備を完全にして、以て労働の効果を大ならしむるは、是れ亦彼の優秀なる企業能力の功に歸せざるを得ず。然り而して斯の如き優秀なる企業者が如何に自己を利し、更に一層多く社會全體を利しつつあるかは、其實例枚擧するに遑あらず。ルロワ・ポリュエー氏か其種々の著書に屢々擧ぐる所の英國製鋼家ベッスマア氏 (Bessmer) の例は余又之を我讀者に紹介するの無益ならざるを信す。

ルロワ・ポリュエー氏は曰く『自由競争の行はるる社會に於て、或企業者の占むる異常なる利潤は決して社會の利益を犠牲にして得るものに非ずして、社會か之に由りて利益を享くることを證するものなり。……例へはベッスマアか鋼鐵の生産費を減少したるに由りて二千五百萬乃至三千萬法の富を成したるか、之は氏か社會よりそれ丈の富を創き取りたるものに非ず。反對に社會は氏の工業的活動、氏の能力、及び氏の發明に依りて、氏よりは一層大なる利益を得たるものとす。

氏は其製出する鋼鐵を從來の製品より一層堅硬にし、其使用の範圍を擴め、其製出に要したる費用を一般に低廉ならしむるを得たり。現今(一八九〇年を指す)佛國に於てベッスマア鋼を毎年五十萬噸製出す。是は世界全體の同種鋼の年産額千萬噸の二十分に過ぎず。顧みて此新式製鋼方法の採用せられたる少し前なる千八百六十年より以來を見るに、佛國に於ける鋼鐵の平均價格は六百六十七法より二百法以下に低落したり。此差減の三分一をベッスマア方法の結果として計算するも、毎噸百五十法の減價となるへし。故に世界年々の總産額千萬噸に就て計算すれば、十五億法の節約となるなり。然らばベッスマア氏の贏け得たる富二千五百萬法乃至三千萬法は僅に其世界を利したる利益の百分二に過ぎざるを知るへし。此製鋼方法が發明せられて以來三十年を経過したるか、其始めの時期にはベッスマア鋼の製出高か今日よりは少かりしことを計算内に入れて、此三十年間ベッスマア式に依る所の世界の總製鋼高を一億五千萬噸と見積るときは、前述一噸當りの節約が百五十法なりしを以て、總節約高は二百二十億法となるへし、然らばベッスマア氏は全世界に二百二十億法の利益を與へて、自己は僅かに其千分一、二五又は千分一半に當る所の二千五百萬乃至三千萬法儲けたるに過ぎざるを知るへし。由是觀之、ベッスマア氏の作りたる巨富は氏か之に千倍する利益を社會に與へたる證據なりと謂ふべきなり』と(前掲書二三二頁乃至二三三頁)。

ベッスマア氏の件は最も顯著なる一例なり、而して世上之に類する者は、大小其例に乏しからず。要するに私的獨占業の或場合を除き、苟も自由競争の行はるゝ社會に於て、合法的に或種類の產業に従事する企業者の總利潤を成す所の各項目は一も非難すべきものあらず。余か前節に列擧したる總利潤の各項目を再審し、余が本節に縷述したる諸論點を考察したらむには、讀者は必ずラッサールやマルクス等の社會主義説か如何に學理に違ひ、實際の事實に戻るかを會得すへし。マルクス等は此複雑なる人間社會を餘りに抽象的に簡單視し、社會階級を兩分して、資本階級若くは有産階級と勞働階級若くは無産階級となしたるは既に謬る。而して彼は餘りに人類を物質主義的動物的に考察し、彼の謂ゆる兩階級間に不斷劇烈の闘争ありと斷論するに至りて更に誤謬を重ねたり。彼の餘剩價值説の如きは、巧は則ち巧なりと雖も、勞働を唯一なる價值の根源及び要素と爲す所の不當前提に由る所の謬れる推論に外ならず。彼が資本と勞働とを對立せしめ、資本は勞働の生産力を剝き取るものなりと爲し。利潤と勞賃とを對立せしめ、利潤は勞賃の不拂より生ずと爲し、利潤の過大なるは勞賃の過小を證すと思考す。特に知らず、資本と勞働とは互に相扶助するものにして、之を結合するは陰に自然あり、陽に企業あることを、又知らず、利潤と勞賃とは相互に汲み取らるるものに非ずして、其根源は外に存し、即ち利潤は主として企業者の企業能力に本つき、勞賃は主として勞働者の生産力に本つき、而かも此兩能力の結合一致に由り資

本の補助に依りて、主として自然より汲み來りたる收入に外ならざることを。諺に謂はすや、鹿を追ふ獵夫、山を見すと。社會主義者は概して勞働の鹿を追ふ獵夫なり、宜なる哉、彼等が資本及び企業の山、利潤及び利子の樹木を見さること。(畢り)

前號本論文正誤(第十三卷第四號五六頁乃至七四頁)

第五九頁末行 解[●]缺[●]とあるは解決の誤

第六一頁二行 Maintenance となつた Maintenance の誤

同 頁六行 Monopoly は monopoly の誤

第七二頁十一行 「投入せられた」の下にるを脱す

第七三頁九行 幸運とあるは幸運の誤